

「薬害」を学ぶための副教材『薬害を学ぼう』の制作過程の検討

——「薬害」の概念とイメージをどのように伝えるのか——

就実大学 中塚朋子

1 目的

過去の様々な薬害事件の反省を踏まえて、「薬害」を学ぶ機会を広く提供していこうとする取り組みを「薬害教育」と呼んでいる。本報告の目的は、「薬害」を学ぶための副教材『薬害を学ぼう——どうすれば防げるのか？なぜ起こったのか？』が制作される過程を取り上げ、公開されている「資料」や「議事録」を検討し、関係者が学校教育の現場に求める「薬害教育」のあり方を明らかにする。

2 方法

本報告で検討するデータは、厚生労働省が設置した「薬害を学び再発を防止するための教育に関する検討会」（以下、「薬害教育検討会」）で配布された「資料」や、検討会での発言の記録が残された「議事録」である。薬害教育検討会は、関連分野の専門家と薬害被害の当事者や支援者から構成され、2010（平成22）年に発足して以来、すでに16回の会議が開催されている〔2017（平成29）年6月現在〕。これらの情報は、厚生労働省の薬害教育推進のためのウェブサイトで公開されている。

薬害教育検討会の取り組むべき課題は、主に、①「薬害教育・医薬品評価教育」の推進と、②「薬害研究資料館の設立」という2点である。その一環として、「薬害」を学ぶための副教材が中学生を対象として制作され、配布されている。本報告では、薬害教育検討会の記録から、（1）「薬害」という概念についてどのように理解を促すべきか、（2）写真などのビジュアル・イメージを利用して「薬害」の情報をどのように伝えるべきか、という議論について注目し、検討を行う。

3 結果

副教材では、「薬害」という言葉の意味は明記されていない。だが、薬害教育検討会では、「薬害」をどのような現象として取り扱い、どのように学んでもらいたいかを議論し続けている。検討会の共通の見解としては、「薬害」とは単なる「医薬品による副作用」ではない、という認識である。個人の「健康被害」では収まらない「社会問題」として、その課題について提起する。

その一方で、検討会では、写真や動画などのビジュアル・イメージを活用しつつ、副教材を制作している。制作過程で、深刻な問題としての「薬害」の情報と、ポップなデザインや個人写真などのビジュアル・イメージを組み合わせることについて、関係者のあいだで認識のずれが顕在化する。しかし、そうした認識枠組みの差異にこそ、「薬害」という社会的な現象の一端が示されているといえる。

4 結論

教育資材が数多く作られる現代において、その制作過程を検討することにより、「薬害」現象そのものの新たな側面が明らかになるとともに、人々の活動や認識のありようが示される。

文献

- 厚生労働省、「薬害を学ぼう」, <http://www.mhlw.go.jp/bunya/iyakuhin/yakugai/>
- 中塚朋子, 2016, 「『薬害』を学ぶための副教材はどのようにして作られたのか——中等教育を対象とした『薬害教育』に関する討議の検討」『「薬害教育」に向けた多声的「薬害」概念の提起』最終報告書（平成25年度～27年度科学研究費補助金〔基盤研究(B)〕, pp. 152-169.
- 中塚朋子, 2017, 「当事者による『ビジュアル・メソッド』の活用と『社会学的想像力』の可能性——キャロライン・ノウルズ, ポール・スウィートマン編（後藤範章監訳）『ビジュアル調査法と社会学的想像力——社会風景をありありと描写する』」, 日本質的心理学会編, 『質的心理学研究』, 第16号, pp. 225-229.